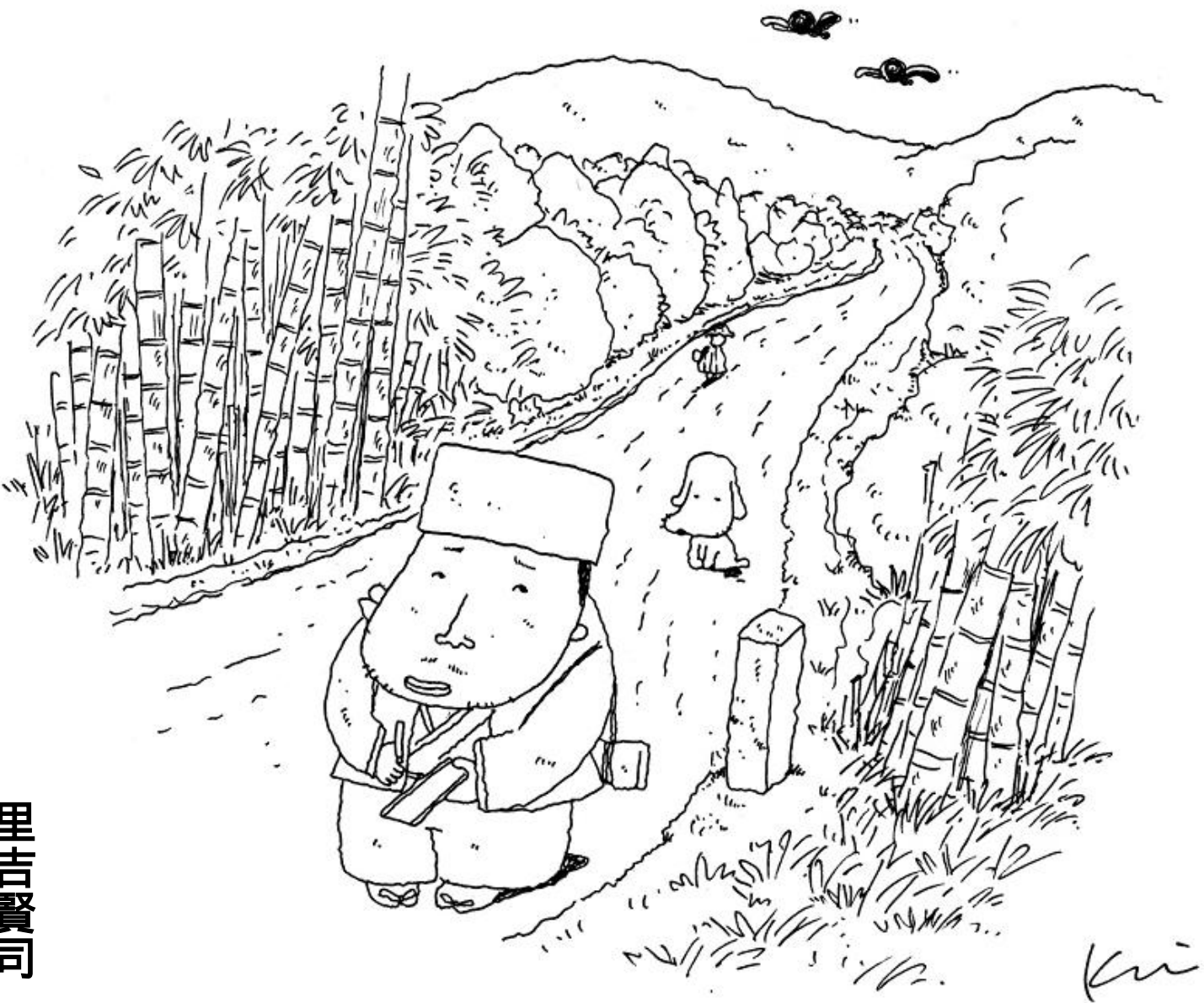


おじやんの青春日記

その11



里古賢司

おじさんの青春日記

その1

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、
世界じゅうの孤独なおじさんに捧げる。

著者

里古賢司

イラスト

栗原俊幸

おじさんの青春日記「ホームページ」
ホームページの作品集をご覧の方は画面ではなく、ぜひプリント
アウト印刷)して読みいただきますようお願いいたします。

www.urban.ne.jp/home/ojisn

新年句会

深夜0時すぎから足かけ四ヶ月にわたって放送された、NHKテレビ番組「街道てくてく旅」は大好きな番組のひとつでした。

私の日常といえば、連日のように日付も変わろうとする時刻、くすぶる未練を机の上に残しながら事務所の灯りを消して帰宅する毎日。帰り途に買ったコンビニのつまみを手に、自宅の居間で酒を呑みながらその日の興奮を鎮めます。しょぼしょぼとお茶漬けをかき込みながらテレビに目をやると、壮麗な裏富士の姿や旧街道の坂道を力強く歩く女性の姿が画面に広がります。

スケートのシヨートトラック、元オリンピック選手の勅使川原郁恵さんが徒歩で京都・三条大橋を出発し、現在の京都府、滋賀県、岐阜県、長野県、群馬県、埼玉県、東京都を横断する旧中山道、六九ヶ所宿の完全歩行をめざします。

京都から江戸日本橋までおよそ五百三十キロ。カメラは雨の日も風の日もひたすら歩く勅使川原さんの苦渋の表情を克明に伝えます。彼女に声援を送る沿道の人たち、街道や畦道に咲く可憐な花や草木。

ひたむきに歩き続ける旅人は手にした江戸時代の浮世絵画家、溪斎英泉や歌川広重の描く浮世絵の風景画と現代を引き比べながら、数百年の歴史が激しく変貌させた情景をデジタルカメラに残していきます。旅人は時には宿場にある小学校に入り込んで子供たちと遊んだり、土地に古くから残る素朴な食べ物味わいながら、またひたすら歩き続けます。京都を出発したのは九月。埼玉県に入って旅もまもなく終わろうとする頃、師走が目の前にやってきていました。

江戸時代の俳人、松尾芭蕉の『奥の細道』。江戸・深川を発った芭蕉が歩くこと一ヶ月で到着した須賀川（現・福島県須賀川市）の宿に残した句があります。

世の人の見つけぬ花や軒の栗

芭蕉

「世のなかの人びとがその美しさに気づかぬ花。それがこの軒端（のきば）に咲いている栗の花であろう。この家に住む人も世間の人の目にとまらぬ人なのだろう。行基菩薩のことなども思い出されて、このように目立たない暮らしをしている人が奥ゆかしく思われる」

俳句研究家の藤井国彦氏はこの句にこのような解釈を添えています。



*

平成一六年師走も半ばのある日、仲間たち数人との語らいのなかで、明けた新年、有志が集って新年の句会を開くことになった。朝日俳句新人賞という大きな賞を受賞したこともある俳句の達人、佳川清資さんが指導講師を務めてくださることになった。

翌年一月の句会までに参加者が三つの句を創作し、会に持ち寄ること。句会の題は「新年」。新年にちなむ季語であればなんでもよろしい。

一時は七千円台に落ち込んで恐慌すら感させた日経平均株価は、その年の暮れやっと一万円台を回復していたものの、金融機関の相次いだ経営破綻の後遺症や経済の萎縮は社会に先行きの見えない不安を投げかけていた。韓国ブームに舞い上がる中高年の女性たちとは対照的に、日々黙々と働くサラリーマンや商店主の多くはうつむいて歩いているように見えた。

明けて一月も下旬。仲間が仲間を呼び、友が友に声を掛け合って、市内外、県外からも十七人の有志が集まった。職業はそれぞれ異なり、年齢も三十代から六十代にまたがる男女。互いに初対面の人も多い。交わされる「おめでとございます」の晴れやかなあいさつ。会社の事務室がにわか作りの会場に変わり、講師のための簡素な演台が設けられた。殺風景な空間のなかで、参会者が持ち寄った備前焼の花瓶と一輪の赤い椿だけが、唯一、これから始まる雅（みやび）な饗宴を予言していた。句会に出席できないアメリカ在住者からは、六つの俳句がパソコンメールで届いた。

江戸時代から伝わる伝統的な句会様式を一部現代風アレンジし、佳川講師の指導で手際よく句会の準備が進められる。

- 一・参加者は短冊三枚の用紙を受付で受け取り、一枚に一句無記名で持参した句を書き込み「投句箱」に入れる。【投句】
- 二・あらかじめ指名された筆記者が投句されたすべての短冊を十分に混ぜあわせる。その中から無作為に取り出した句を、あらかじめ別の用紙に清書する。筆跡によって誰の句かがわかるのを避けるためである。【清記】
- 三・清書（清記）された用紙をコピーし、参加者全員に配る
- 四・参加者全員が清書された全員の句の中から自ら推す佳作七句、特選一句を選ぶ。ただし、自作を選んではいけない。【選句】

テーブルに置かれた幕の内弁当や手作りのお雑煮を食べながら、おしゃべりの輪があちこちで広がる。弁当に箸もつけず清書を手に考え込む人。あれこれと隣に相談を持ちかける人。

いよいよ各々が選んだ句の発表となる。【披講】

五・座席の順に「（姓を省いた名前） 選つ」と選者名を名乗り、大きな声で佳作から順に八句を読み上げる。たとえば「太郎 選。……………」と。

読み上げられた句の作者はただちにその場で挙手し自分の名前を名乗る。

「花子！」と。

実際の句会ではそれぞれ俳号を名乗るそうだが、今回の句会はもちろん俳号など持たない素人ばかり。

六・佳作七句のあと、選者は最後に特選一句を読み上げる。

特選とされた作者は晴れがましく、ある人は照れながら名乗りを挙げる。

この工程が席順にそって次々と繰り返される。部屋は暖かく、ビールの酔いもほどよく回って、肅々と典雅な時間が過ぎていく。

あたりの住宅街はしんと静まり返っているなかで、この部屋だけが日本語の新たな発見と心地よいスリルに沸いているように思えた。

全員の披講が終わり、佳川清資講師によって全員の句への講評が述べられる。

最後に講師自身の作品の発表によって句会は終了となる。

佳川講師が句会の最後で講評されたように、各氏の俳句はにわか創作された素人の作品とは思えない、独創と吟味が重なりあった作品ばかりのように思えた。

人生を旅にたとえるならば、十七名の旅人はあちらこちらから集まって、広島島の片隅で触れあった。句会は旅人の交差点でもある。

ふり絞るように生み出された俳句の一句一句に、旅人の背負う荷物や、彼らが残してきた足跡が垣間見える。生きるものの常として、ただ一人として同じ旅程をたどる者はいない。

そこに集った人たちは猛々しく権力や栄達を求める人はいない。須賀川に残した芭蕉の句のように、そこにいるほとんどの人がひっそりと清々しく、精一杯生きている人たちのように思えた。

印象に残るいくつかの俳句を佳川清資講師の講評とともにご紹介する。作者の年齢は三十代、四十代、五十代の三世代。それぞれの作者たちのこれまでの旅、これからの旅を私の思うまま綴ってみた。素晴らしき旅人たちへの敬意をこめて。

祐子

神前に深き黙想初稽古

祐子

【講師講評】

句格が高く、凜とした作品で、句意も明確です。良い俳句と思います。

拝啓

佳川清資先生。

新年句会以来、長らくご無沙汰いたしておりますが、その後いかがお過ごしでしょうか。早いものである句会以来、二度目のお正月が巡ってこようとしています。その節は素人の私たちに素晴らしい句会の伝統と技法をご指導いただき、本当にありがとうございました。初対面同士の方も多いのに、句会のあの熱気や一体感は今も体験したこともない、まったく異次元の世界でした。満ち足りた句会が終わったとき、皆さんから漏れた何とも表現のしようがない、「充足のため息」は今も忘れることが出来ません。私は句会の末席で傍聴させて頂くだけのつもりでありましたので、俳句も句会直前になってあわてて句作したものです。その私の句が思いもかけず佳川先生の講師披露で特選にあげて頂いた時は、狐につままれたような思いでした。でもそれからというもの、今も私のなかに綿に点いた火のように残る嬉しさと、創作の歓びをしっかりと味わせて頂いています。

きぬぎぬの別れはいはず歌かるた

清資

講師講評のあとに披露された佳川先生の句。たぶん先生にとってはお遊び気分のことだったのかもしれませんが、わずか十七音に封じ込められた妖艶で淫靡な言葉の世界は、私たち一般参加者との歴然とした力の差を見せつけられた思いでした。佳川先生に教えられた「余情」という、言外の情趣を大切に作る日本人独特の感性を若輩の私はい

まだよく理解できずにいます。

私は小学三年生から六年生にかけて、自宅近くの空手道場に通っておりました。空手の師範は能勢明憲先生。上達することや試合に勝つことよりも、空手を通じて子供達が心身ともに健全に成長してほしい、という能勢先生の思いを強く感じる道場でした。今も忘れることの出来ない出来事があります。

ある時、子供を対象とした「形（かた）」の試合がありました。二名の選手が同時に形を演武し、その優劣を主審一名、副審四名が判定するというものです。

私が出場するこの試合で能勢先生が副審の席に着かれました。

私は下手なうえに、相手に気をとられるあまり集中力のまるでない演武に終わってしまいました。「五対〇」で負けたと確信しました。

判定の旗が上がりました。四対一で負け。しかし一本だけ、私を優勢と判定してくれた旗があったのです。それが能勢先生の旗でした。

その旗を見て、小学生の私は雷を受けたような衝撃を味わいました。

「試合には負けたけれど、先生があげてくださったあの旗に恥じないような人間にならなければ」

と強く思ったのです。

神前に という私の句には、端然と正座し、黙想される先生の凜然たる後ろ姿が重なります。

成人してから、三島由紀夫の著書「若きサムライのために」という本を読む機会がありました。そのなかに次のような一節があります。

以前、夏のさかりに熊本を訪れ、有名な道場の龍驤館（りゅうじょうかん）で、少年たちと剣道の稽古をしたのち、全身にしたたる汗のまま、正座をして、先輩格の少年が、はりさけるような声で、

「神せえ〜ん」

と号令をかけ、神前に礼をしたときのさわやかさは忘れがたい。それは暑熱の布地を一気に引き裂くような涼しさだった。私は作法というものが、どんなに若者を美しくするか、それに比べて、作法のない世界に住んでいる若者たちは、どんなに魅力がないか、という実例を見る気がした。

思いを込めた能勢先生の旗があがって二十年。私はあの旗に恥じないような人間になっているでしょうか。いいえ、まだまだです。

私は大学を終えて一年半の会社勤務ののち、平成八年（一九九六年）からおよそ一年半、中華人民共和国・深圳（しんせん）の深圳大学で留学の日々を送りました。

その前年には当時の村山富市日本国首相が「終戦五十周年の首相談話」のなかで中国へ

の謝罪を含む談話を発表し、両国の首脳や要人が活発に往来していた頃でした。

一年あまり住んだ中国ですが、いまだに中国という国を自分の言葉で語りきれないでいます。あまりにも巨大すぎて。そのパワー、地の底から沸きあがってくるような人民の熱気。とりわけ、若い女性の元気の良さは見ていて気持ちがいいほどでした。小さい時から自立心が強かったせいなのかもしれないませんが、私は日本という国がたとえ小さな国であっても、たとえ貧しくとも、あらゆる意味で自立した国、アイデンティティをもった国であってほしいと願っています。こんなにも素晴らしい伝統や文化、俳句や和歌の源となった四季、そして赤の他人にさえ愛（いつく）しみを寄せる心豊かな人々が住む国なのですから。

佳川先生。私は休日にはフリーマーケットによく出かけるのです。今着ている私のブラウス、三百円。スカート、大枚千円！

初めのうちは、「すごいっ、こんなに安く手に入るなんて！」という驚きもあって通っていたのですが、最近はモノを買うことよりも、そこにいる人達のウォッシングや、並べた商品からそれを出店した人の生活を想像してみたりすることの方が楽しく思えるようになりました。こんな時、香港や深圳の街のあの雑踏を思い出すことがあります。

いつかこんな情景を俳句にして、佳川先生に見て頂きたいと思っています。あの句会の時のような添削をいただけますでしょうか。いつの日か、ふたたび句会の席で先生にお会いできますことを心から楽しみにしております。

寒くなります。どうぞご自愛いただきますようお願い申し上げます。

かしこ

幸春

元旦に響く心をほらす雪

幸春

【講師講評】

お正月らしい情緒のあるすがすがしい俳句です。この句も元旦と雪と冬の季語（とが季重なりですが、ごちからのほうは全く問題ありません）

元旦の雪にこころの響れどけり

とこころのはなびらでけりか？

幸春さんは地方公務員。「月に一度は余暇を作って創造的なことに挑戦してみる。これ

が最近の自分への課題なんです」と以前笑いながら話してくれた。

日曜日には小学生の息子達と一緒に鋤(くわ)をあげて畑を耕したり、芋の苗を植えることも彼にとっては創造のひとつである。

役所内では法律や条例、そして前例の有無にも拘束される仕事が続く。絶え間ない市民からの苦情や、日々の挙動への目にみえぬ周囲の注視。庶民の鬱憤は往々にして公務員にぶつけられる。おまけに彼の仕事は役所全体の事業の進み具合をチェックしたり、市民アンケートの分析調査、その対応というストレスの多い仕事である。創造的なものへのあこがれや、せめて余暇には自由に発想をめぐらせてそれを何かの形に表したい、という彼の秘かな願望は容易に理解できる。

「えっ、平素なにを考えているか、ですか？ うーんそれは……まず第一に、市民の幸せのために自分に何が出来るか、ですね」

と彼は言い切る。格別力みも銜(てら)いもない。彼の真情だろうと思う。

「少なくとも私は、自分たちの町は自分たちで創り、育てる気概をもって頂くことを住民の皆さんにお願いしたいと思います。国も含めて、公務員が必ずしも市民を幸せな方向へ導いているとは限らないのです。幾多の歴史がそれを示しています。公務員が示す方向が間違っていれば、それを皆さんに正してもらわねばならないと思うんです。私達はあくまでも黒衣(くろこ)として、それにしたがって働くことが理想の姿なのかもしれませぬ」

彼の言葉は抵抗もなく、すつと飲み込めて、私の胸をうつ。おそらくそれは、彼の俳句のように爽快で純朴な彼の人柄がなせることだろう。

句会の会場まで幸春さんは遠くの停留所で電車を降りて、わざわざ数キロの道のりを歩いてやってきた。

「久しぶりに来る町ですからゆっくり歩いてみたいと思いましたがね。この町は僕たちの管轄区域ですからね。町のなかに役所の仕事の不備や手抜きはないか、異変はないか、と街並みや人をよく観察しながら歩くんですよ。それに、いまだに迷っているきょうの俳句の推敲もあれこれ考えながらね」

役所に入ってまもなく二十年。近頃は厳しい緊縮財政のなかで、使用済みのコピー用紙を裏返して使ったり、昼の休憩時間にはこまめに執務室の電灯を消して歩くことにも慣れてきた。

昭和二十七年(一九五二年)公開された黒澤明監督作品の映画『生きる』は、ある中年公務員の生と死、世間の不条理を見事に描いた秀作である。

志村喬演じる中年公務員、渡辺勘治は役所の市民課長。三十年間無欠勤。判をつくことが最大の任務である役人生活を送る彼は、山と積まれた書類に埋もれて無気力な日々を送っている。役所のなかのあだ名はミイラ。このところ胃の調子が悪い。

ある日、町の主婦たちが市民課へ陳情にやってくる。町内に大きな汚水溜まりがあるために子供達の病気や害虫が絶えない、なんとかしてほしい。かなうことならばそこを埋め

立てて、子供たちのための公園を作ってほしい、というものだった。渡辺は主婦たちの訴えに顔もあげず部下につぶやく。「土木課」。主婦達の請願は庁内のほとんどの課をたらい回しにされたあげく、結局無視されてしまう。この役所では面倒なことは何もしないのが得策なのだ。

胃の検査結果を聞きに病院を訪れた渡辺は「余命四ヶ月」という事実を隠した医師の診断を信じない。自分のことは自分が一番よく知っている。自分は残りの命も少ない「胃がん」なのだ、と。

絶望の底に落ちた渡辺をただ一人の息子も、その妻もとりあおうとしない。渡辺は自分の運命を家族に打ち明けることも出来ず、ひとりむせび泣くだけであった。

役所を無断欠勤した渡辺は多額の預金を下ろして、数日歓楽街をさ迷い歩く。酒場で出会った小説家は、この男に最後の快楽を味合わせてやろうと夜の町を案内する。そこは渡辺にとつて足を踏み入れたこともない世界だった。しかし、なにか空しい。

キャバレーのピアノにあわせて渡辺はたったひとつ記憶にある歌、「ゴンドラのうた」を口ずさむのだった。

いのち短し 恋せよ乙女

紅きくちびる あせぬ間に

渡辺は一点を見つめて歌う。目から涙が伝い落ちる。

おもちゃ工場で働く役所の元女性職員に出会った渡辺は、彼女の屈託のない明るさが限りなくうらやましく映る。彼女が工場で作るウサギの人形に渡辺は目を奪われる。

「……こんなもんでも、作つてると結構楽しいのよ。日本中の子供たちと仲良くなったような気がするの。課長さんも何か作ってみたら？」

「もう遅い」「とつぶやく渡辺。

翌日、役所へ出勤した渡辺市民課長は、すぐさま町の主婦達が陳情に来た汚水溜まりの視察に出かける。渡辺は確信する。遅くない、やる気さえあればここを子供達のための立派な公園にすることが出来る、と。

渡辺は思いつめた表情で現地の調査に歩き、役所内の各課を懸命に口説いてまわる。主婦達を率いて鬼気せまる形相で助役に迫る渡辺。自分には残りの時間がないのだ。

それから五ヶ月後、渡辺は死んだ。渡辺は雪の降るなか、完成したばかりの公園で死んでいたのだ。

渡辺の通夜の席のシーンがこの映画でもっとも長い場面となる。息子夫婦らを前に、上司の助役をはじめとする役所の同僚達の議論が紛糾する。渡辺は凍死した、いや自殺したのだ。いや、胃がんだった。彼はそれを知らなかった、いや、知っていてその上で公園を作ることに奔走したのだ、と。

渡辺の成果をわが手柄のように語る上司の助役。公園の完成は役所あげての働き、組織の成果なのだと主張する役所の幹部達。しかし渡辺の部下、木村だけは渡辺の死力を尽くした奔走がなければ絶対にあの公園は出来なかった、と渡辺を弁護する。

「課長の熱意が通じなかつたら、世の中、聞かないですかつ」と。

その席へ公園建設の陳情に日参した町の主婦達が連れ立ってやってきた。赤ん坊を背負ったままの主婦もいる。渡辺の遺影の前でただすすり泣く主婦たち。

役所の面々はその情景に息を呑み、言葉もない。続いて焼香に訪れた交番の巡査は、遺影にむかつて深々と敬礼を捧げたのち語る。

その夜、渡辺が雪の舞うなかを公園のブランコに揺られて遊んでいたこと。なにやら歌を歌いながら、彼はほのぼのと笑みを浮かべていた、と。

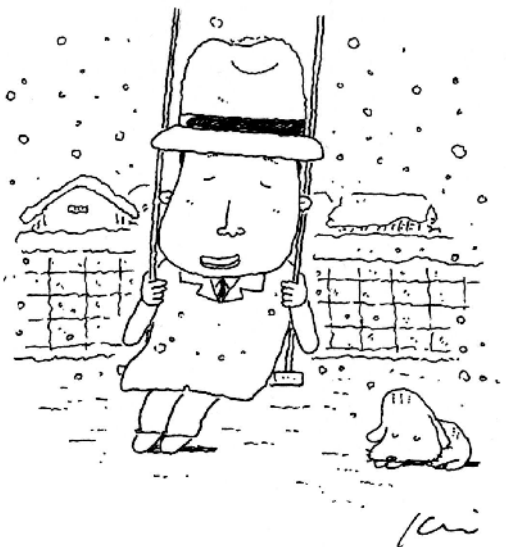
いのち短かし 恋せよ乙女 紅きくちびるあせぬ間に

熱き血潮の冷えぬ間に 明日の明日はないものを

いのち短かし 恋せよ乙女 黒髪の色 あせぬ間に

心のほのお 消えぬ間に 今日ふたたび来ぬものを

渡辺課長が生きた時代から五十年という日本の歳月が流れた。渡辺課長と同じく公務員である幸春さんは当時まだ生まれていない。多忙な仕事の合間を見つけて創作に挑もうとする幸春さんは、この映画『生きる』を観て何を思うだろうか。



裕己

とんど祭集いし翁の眼に焰

裕己

【講師講評】

とんどの火を受けて輝く翁(おきな)の眼が、老人の豊饒(かくしゃく)たる内面の意志を反映しているような鮮烈な印象。これが翁ではなく、子供や若い人だったら平凡だったでしょう。

大学生の頃、裕己さんは授業を終えたあと、当時新設されたばかりの夜間の電子計算機塾に通っていた。その頃はまだコンピュータという言葉も珍しく、もっぱら「電子計算機」と呼ばれていた。当時のコンピュータはディスプレイ(画面)もなく、ただカタカタと穴のあいたテープやプリントされたデータカードが打ち出されるだけの機械だった。パーソナルコンピュータ(パソコン)が一気に普及し始めるのはそれから二十年を経たのこのころ。その意味で裕己さんは、コンピュータ分野における広島でのパイオニア的存在である。今買えば千円もしない電卓が三十万円もしていた時代に、コンピュータの時代が到来することを見通し、大学に通いながら夜間の塾に通学した彼の慧眼は今思えば驚嘆するばかりである。

大学を卒業した裕己さんは、大手書籍会社が当時創設したばかりの電子計算機部に入社。今でいうシステムエンジニアとして各地の顧客を訪問する仕事に没頭する。現在はソフトウェア会社の役員として、顧客の経営者と議論を続ける日々を送っている。

裕己さんのお父さん、壽真さんは生涯を教育者として貫いた。お父さんは退職するまで進行性筋ジストロフィーなどの難病をもつ小学生、中学生、高校生を、病院に付属した施設で教育するという特殊な仕事に携わっていた。学生時代、私が郊外の農村にある裕己さんの自宅を訪ねると、車椅子に乗った子供たちが歓声をあげて草木のなかで楽しそうに遊んでいる情景に出くわすことがあった。

当時、広島県立原養護学校校長だったお父さんが、病院の外で遊ぶ機会が少ない子供達を自宅に預かって、ホームステイさせていたのである。絶望的な難病のうえに、親の消息がわからない子供や、帰る家のない子も多くいた。裕己さんはホームステイした子供達の訃報が、頻繁にお父さんのもとに入っていたことを今も憶えている。

教え子達のほとんどが二十歳に満たないうちに死亡してしまう現実と直面しながら、彼のお父さんは「学ぶ」「勉強する」「教える」ことの意味をどう考え、どう子供たちに伝えていたのだろうか。

学生時代から映画ファンだった裕己さんは、先祖が残してくれた蔵を改造して自分専用の映画館を作る準備を少しずつ始めている。

「わしの学生時代はなんちゅうても東映のやくざ映画。映画館を出るときにや、なんか高倉健になったみたいに肩をいかせて歩きよったもんじゃ。社会人になってからは神代辰巳や藤田敏八監督なんかの日活ロマンポルノ。ようオールナイトへ通うたもんよ。潔癖で厳格なおふくろに知られたら勘当もんじゃった。『教師の息子がなんということを

』というのがおふくろの口癖じゃったけんね。

わしの土蔵映画館、完成したら仲間をよんでオープニング鑑賞会じゃ。藤純子演じる緋牡丹お竜さんが片肌脱いで、うちの土蔵の大型スクリーンで日本刀片手にタンカを切るううう。ああつ、たまらんつつつ。」

お母さん、お父さんと続けざまに両親を野辺に見送った裕己さんは、映画館づくりとともに農作業に精を出している。最近はゴルフ帽よりも麦わら帽の方が似合うようになった。「太陽や空気、風、水、土の豊かさや厳しさを実感しながら、作物や果樹が生長していく過程が見られることがすごいね。収穫に喜びが感じられるようになったよ。農作業を親の命令や義務感でやっとなるときは、楽しさなんかまったく感じんかったけど。じゃけど、まだ作物を作っとならんじゃなく、できた、という言葉が正しい。自然に相手にされらんし、遊ばれとるいう感じじゃ。」

四季折々これだけの自然に囲まれて暮らしていながら、今度のような機会がなかったら、一生俳句なんか詠むことはなかったかもしれない。たったの三句作るのに何日かかったことか。思いを表現するのに直接的な言葉や説明をしてはいけないということは、それを読む側にもそれなりの力が必要、ということ。五七五の短い言葉で森羅万象を表現する難しさや奥深さとともに、このことがようわかったよ。そういえば映画も同じことなんかもしれないね。」

裕己さんの自宅は三方を山や田畑に囲まれ、晴れた日の縁側からは遠く瀬戸内海に浮かぶ雲がパソコンのスクリーンセーバーのようにくつきりと見渡せる。

彼の数代にさかのぼる先祖たちは、自宅すぐ近くに佇む塚で土と同化して眠っている。裕己さんの句にある翁（おきな）という言葉から、八九歳で亡くなった彼のお父さんの穏やかなまなざしが浮かび上がって見えてくる。

参考文献資料

新 奥の細道を読もう」 藤井国彦 編著 さえら書房刊)
芭蕉俳文集(上)」 堀切実 編注 (岩波書店刊)
映画「生きる」 昭和二十七年(一九五二年)東宝株式会社製作
若きサムライのために」 三島由紀夫著 (文芸春秋社刊)

おじさんの青春日記 その11

著者 里吉賢司

発行者 733 0034

広島市西区南観音町一七番二〇号

株式会社 里吉製作所

電話 (〇八二)一三一・三一〇九(代表)

FAX (〇八二)一九一・三三四九

E-mail ken1221@urban.ne.jp

製本冊子頒価 一〇〇〇円(送料別)

発行 二〇〇七年(平成一九年)一月一日

「おじさんの青春日記」シリーズ ホームページアドレス

<http://www.urban.ne.jp/home/ojisan/>